

平成23年第4回定例会（12月）一般質問

(2) 月形町の歴史遺産を活かすまちづくりについて

2.物故者追悼式のあり方

○ 議員 宮下 裕美子 第3点目の質問に入りたいと思います。月形町の歴史遺産を活かすまちづくりについて2.物故者追悼式のあり方についてです。先ほど町長が具体的にということでしたので、今回は物故者追悼式のあり方について質問したいと思います。

物故者追悼式は、長らく続く月形町としても歴史のある重要な行事の1つであるが、近年規模が拡大し、また追悼式の有り様も変化したと感じています。昨年130周年の行事があり、今年は地域創造フォーラムがありました。これらが終了し、一区切りを迎えた今、物故者追悼式のあり方、進め方を見直す時期であると考えています。現状の物故者追悼式に参加した中で疑問が2点ありますので、この2つについてお答えいただきたいと思います。第1点目は、物故者追悼式を年々盛大にしてきた理由は何でしょうか。第2点目は、招待者の範囲を広げてきていますが、その意義は何だったのか。この2点についてお伺いいたします。

○ 議長 笹木 英二 町長。

○ 町長 櫻庭 誠二 具体的なところでどのようなお答えをされているのか、分からないというのが実際のところであります。平成17年、18年の物故者追悼式は、総勢25名ぐらいでありました。大きく変わるきっかけとしてこれではあまりにも少ない、矯正関係者を含めると町内出席者は10名程度しかいない状況でありました。これでは私たちの町が拓かれていく、北海道が拓けていく犠牲になった1022名の御霊に申し訳ないという気持ちもあり、平成19年には全議員に出席を願ったところでありました。その折りに札幌開発建設部道路事務所長、石狩川開発建設部岩見沢河川事務所長にもご出席いただきました。そこでこのお二人にどのような印象を持たれたか聞いたことがあります。「この行事は、月形町だけの行事ではない。まさしくこれはもっと道民みんなが知ることであるし、それにおいて道民みんなで感謝するイベントに育て上げるべきです。」というアドバイスをいただきました。その折りに言ったことが「札幌開発部部長と石狩川開発建設部部長には私の方からしっかり出るように言っておきます。」ということでした。平成20年には札幌開発建設部部長、石狩川開発建設部部長、杉植樹に関わってくれた岩見沢森林管理署長にも出席いただくという中で、名誉町民にも出ていただきたい。月形町から分村したという意味で浦臼町長にも出ていただきたいということで、それが20年でした。21年につきましては、それぞれ

のかたちの評価として上がったのです。物故者追悼式だけに出席していただくのはもったいないのではないかと。終わった後に博物館にも足を運んでいただき、より多く月形の歴史を知ってもらうことが重要なことではないかということで、物故者追悼式の後、職員にカレーライスを作っていただき、それを食べた後に博物館を見学していただくということで、多くの来賓の方に博物館に足を運んでいただきました。その結果、当時、空知支庁長は支庁の職員30名に「樺戸博物館に研修に行ってください。」ということで、二次的な動きがありました。美唄駐屯地司令においても隊員に業務命令を出し、隊員の皆さんが樺戸博物館に足を運んでくれる。石狩川開発建設部の皆さんは、川の歴史を語る川を語る会の開催提案をしてくれる。そんなことから私たちの町が物故者追悼式で多くの人に知ってもらうことで、より多くの活動に幅が出たと理解しているところです。本年においても岩見沢警察署長が「月形町物故者追悼式に出席して感激した。そして命というものに対して感謝し、そこに吊っている姿勢に感激した。今、北海道警察は「命を大切にす」キャンペーンとして講演をやっていますが、これも月形でやらないか。」という提案をいただいて、月形高校でその講演をやったところでもあります。私は今までこの参加規模が大きくなっていくことで、その評価は出てきた結果としては、想像を超えるところでプラスに働いたと感じているところでもあります。

○ 議長 笹木 英二 宮下裕美子君。

○ 議員 宮下 裕美子 今、町長からこれまでの変遷と拡大してきた経緯をお伺いしました。私が知っているのは物故者追悼式だけで、その後の波及効果については知る機会もなく様々な展開がされているということでは、十分に意義があったことだと思います。しかし来ていただくことで広げて行けば、勿論来ていただいた人は物故者追悼式は十分満足できるものですし、樺戸博物館に初めて入館する人であれば、一度来ただけで新しい発見もあるでしょう。それは物故者追悼式を使わなくてもきちんとした付き合いの中でやることも可能ではないかというふうにも考えます。先ほど町長が言われた様々なことは、どちらかと言うと町外の皆さんにいかにかPRするかという点だけが強調されたように思いますが、私がここ数年出ていた中で、町民の皆さんが物故者追悼式から気持ちが離れて行っている、自分たちの町の追悼する式典であるというところから遠ざかっている印象を受けています。9月の決算委員会で同じように物故者追悼式の関係で質問しましたが「町民が離れているのではないかと」と質問したときの町長の答弁は「町民招待者も増やしていて、問題はない。」ということでした。確かにIP告知で何度も周知されましたし、広報などもありましたけれど、実際、当日来られた方は1人、2人しかいなかったということです。過去において私が出はじめた19年頃ですと町民皆さんが自由なかたちで参加されている方が10名以

上いたと認識しています。そのように町民が自由に参加できる雰囲気から今の規模を拡大して尚かつ対外的な要人を呼ぶような物故者追悼式になったことにより、追悼式本来の目的、町民にとって哀悼の意を捧げるという町長が目指す本来の目的から外れていっているのではないかと考えます。歴史遺産を活かしたまちづくりと照らした時に、もっと町民が参加できる追悼式をまちづくりに連動させることができるような展開が必要ではないかと考えます。

そこで提案が2点ありますが、例えば今、中学生は町歌を合唱するために来ていただいておりますが、現在は合唱だけですぐに帰ってしまう状況なので、追悼式そのものに参加させて献花の体験をさせ、それが月形町児童生徒にとって心にきちんと刻まれ、未来を開く子どもたちの郷土愛を育てるような体験として成長できないか。もう一点は、以前行われていたように町民から詩吟や民謡、舞など奉納を行ってもらい、町民による追悼式であることを、もっと町民に強く動機付けすることが必要ではないかと考えますが、町長の考えをお伺いいたします。

○ 議長 笹木 英二 町長。

○ 町長 櫻庭 誠二 何点かあるので答弁漏れがありましたら指摘願いたいと思います。最初に今年について一般参加は1人か2人だったということで、私が出た最初の時は10人を越える一般参加があったということです。この年に詩吟グループがそれまで詩吟を吟じていましたが、年と共に声がでない、どうしても詩吟としての鎮魂歌をお供えすることができないということで、かつて中学校の記念式典で演奏していた斉藤かすみさんにオカリナ演奏で鎮魂演奏をお願いしたところでありました。斉藤かすみさんは2回、3回と博物館に足を運び、現地にも行き「赤い人」も読み、その中でしっかり御霊に対する鎮魂の演奏をしていただいたところでありました。その時に斉藤かすみさんのファンの方たちが今ご指摘のような10名はいなかったと思いますが、いたと理解しているところでありました。ただ町民全体としての人数は先ほど言いました17年18年の総勢25人、30人の頃と比べると全く規模が違うだけ、多くの方が参列してくれていると考えたところでありました。私も町勢要覧の中に書かせていただいているのは「月形町は樺戸集治監を語る際に最も重要なのは、赤い人々(囚徒)への哀悼と慰霊、そして感謝である。」このことをどうしても歴史の物語の中に入れて欲しいと出版社に頼んでやってもらったところでした。その思いが演奏者を含めて皆さんが体現してくれていると信じているところでありました。また、先ほどの質問で中学生の町歌については、歌うだけですぐに帰ってしまうのではないかとということですが、私もそのように思います。ぜひとも最後まで参列いただき、献花をお願いしたいと中学校をお願いしていたところですが、教育プログラムの関係で現在はそれができない、検

討中にあります。ただ昨年の物故者追悼式に出た今は前任者になりました札幌矯正管区長は、この出来事を矯正協会発行の機関誌「刑政」のお正月の巻頭言で月形町物故者追悼式における式典に中学生が参加し、歴史的な事実に参加していくことに、高い評価をいただきました。早速全国の篤志面接員の人たちから月形町樺戸博物館に行きたいという評価をいただいたところでもあります。決して私たちは今やっていることが無駄ではないし、そのことでしっかりその思いを参加者皆さんで共有することが私にとって規模でもないし、赤い人たちに対する哀悼、慰霊、感謝の気持ちであると感じているところでもあります。またこれは樺戸監獄物故者追悼式に限らず、月形町において7月には戦没者慰霊祭も行っています。130柱が累次の大戦で亡くなっていること、この御霊についてもしっかり哀悼、慰霊しなければならないと思っています。犠牲にならないまでも厳しい状況で月形町を北海道開拓してくれた先人に対して感謝の気持ちを持つことを、私たち役場職員、議員の皆様、多くの月形町の代表がそこに想いを寄せて行動することが、これからを引き継ぐ子どもたちに背中では教えることではないかと感じております。

○ 議長 笹木 英二 宮下議員の質問の中で、毎年規模が大きくなっており、戦没者追悼式は例年同じ規模で行われているが、町長の考えとして今後も大きく盛大にして、招待客も増やしてやっていく気持ちなのかということも、宮下議員の質問にあったと思います。

○ 議長 笹木 英二 町長。

○ 町長 櫻庭 誠二 昨年は130年、今年は地域創造フォーラムということで、特に今年地域創造フォーラムの参集範囲は全道市町村長が対象であります。そこに全部案内状を送ったところですし、地域創造フォーラムの一貫としての物故者追悼式でしたから、多くの市町村長が参加いただいたところでもあります。また130年、今回については節目、そして地域創造フォーラムということで、昨年は多田副知事、今年は高井副知事、矯正管区から今年は大蔵官房審議官に出ていただきました。そして開発局は局長名代として代表が出ていただいたところでもあります。これらの人につきましては、それぞれ大変忙しい方々ですから、スケジュールその他調整をすることが大変なことでもあります。これらにつきましては、今後の周年事業まで呼びしないのが筋であると感じています。また関係市町村長についても極めて近い関係市町村にとどめるべきであると考えております。以下の陣容については、同じようにやりたいと考えております。

○ 議長 笹木 英二 宮下裕美子君。

○ 議員 宮下 裕美子 今、町長から物故者追悼式に関係する熱い思いを伺いました。確かに町長の熱い思いは大事ですし、故人への思いがあるから様々なことが動いていくので、そのような思いがあって理事者として当然であると思います。ただ個人的思いをきちんと

まちづくりに投影し、先ほど言われた様々な展開、成果があるなら、それらも含めて物故者追悼式のあり方や目指すものそしてその後のまちづくりの波及効果等を、ぜひとも説明していただかなくてはならないと思います。町で行うということは、税金を使っているということです。個人的な思いがあってもそれがまちづくりに結び付いて成果が次期に還元されるのであれば、税金を使う本来の目的を達成できるので、何の問題もないと思いますが、今までのところ私たち参加者はひたすら物故者追悼式が拡大し、参集範囲が広がり、対外的な方々がひたすら増えていく現実しか見ていないし、それ以上の説明もありませんでした。今後、このように予算を使いながら物故者追悼式のあり方として、先ほど町長が言われたように北海道全体として弔うという意識であるなら、そのことをうちの町の町民にもきちんと説明していただきたい。そして先ほど物故者追悼式に参加した人たちで弔い意識を共有したいと言うけれど、物故者追悼式は月形町全町民の共有のものとして追悼の意を表すのが本来ですから、招待客や参加した人だけが考えるのではなく、いかに町民全体を取り込みながら町民全体で物故者追悼式を考えていくようにし向けることが必要ではないかと思います。そういう意味で先ほどの答弁で今後も同じように多少に規模縮小はありながらも同じかたちで進むということでしたが、もっと町民側に向けた町民自体が物故者追悼式を自分たちの町の行事と認識できるような取り組みが必要であると思いますので、それに対して今後どのように進めるのか、お伺いします。

○ 議長 笹木 英二 町長。

○ 町長 櫻庭 誠二 私は町民共有の物故者追悼式であると今まで仕掛けてきたつもりであります。何度も説明しますが、17年、18年における総参加者数は25名、30名だったのですが、その中に矯正管区の人たちも含めた人数であります。現在、町内の参加者だけで70名ぐらいは下らないだろう、子どもを入れると130名ぐらいが参加していると自負しているところでありますが、税金を使ってということがありました。今年の地域創造フォーラムの懇親会として物故者追悼式の後に会費をいただき地産地消というかたちで食事をテーマとしてやりましたが、このことについては止めるというところですし、2年間については職員に手作りによるカレーライスの提供でありました。これらについても更生保護・日赤奉仕団の皆さんの協力をいただきながらやるのが、町民参加の意識高揚につながる効果があるのではないかと考えております。